

日本テスト学会第 11 回大会 参加報告

ベネッセ教育総合研究所 高等教育研究室

研究員 野澤雄樹

日本テスト学会第 11 回大会は、2013 年 8 月 27 日～28 日に九州大学医学部百年講堂で開催されました。日本テスト学会は 2003 年の発足以来、テストの理論と実践という二つの側面を扱っていますが、今大会のテーマは「研究と現場を往還するテスト学」ということで、理論と実践の距離感がより強く意識された大会だったと思います。大会期間を通じ、3 つの企画セッションと 7 つの一般セッションが行われ、大学入試や採用試験、批判的思考力を測定するテストや医療・看護系のテストなど、幅広いテストについて議論されました。以下では、企画セッションを中心に報告します。

ベネッセ教育総合研究所が企画したセッション『「書く力」の必要性と評価—論述試験における諸問題—』では、立場の異なる 3 人の先生が「書く力」について話題提供を行いました。「書く力」に対する考え方が話題提供者の間で異なるだろうことは予想していましたが、それどころか「論述テスト」というものの自体の捉え方が大きく異なることに強い衝撃を受けました。「テストは測定のための道具である」という考え方は、現場のリアリティの前ではそれほど強固なものではないと実感しました。そのような現実を前にして、測定の専門家はどのような役割を果たすべきか、考えさせられるセッションでした。

続いて行われた企画セッション『「テスト業務」の現在』では、テストの実践に関わる測定の専門家がどのような業務を行っているか紹介されました。地方自治体に対する採用試験問題の提供、アドミッションセンターにおける業務、コンピュータベーステスト (computer-based testing, CBT) の基盤提供サービス、大規模テストの運営といった、普段は知ることのできないテスト業務の実際について貴重な情報を得ることができました。

二日目に行われた企画セッション『項目反応理論の現状と今後の展開』では、一般化部分採点モデルを多次元に拡張する際に生じる問題点、因子分析と多次元項目反応理論の違い、受験者を比較的少数の能力段階に分類する潜在ランク理論の有用性といった話題が討論されました。項目反応理論のさまざまな拡張について非常に勉強になった一方で、信頼できるコンピュータ・プログラムが簡単には手に入らない現状もあり、研究と現場のギャップを感じました。

企画セッションを中心に報告しましたが、一般セッションにおいても興味深い発表が多数ありました。例えば、多次元項目反応理論における等化 (尺度変換) の研究は、今後の実践を支える上で重要になると思います。また、批判的思考力を測定するテストのように、開発中のテストに関する発表があったことは、日本テスト学会のユニークな点だと思いました。

来年の日本テスト学会 (第 12 回大会) は帝京大学八王子キャンパスで行われる予定です。